

# 児童・生徒の思いやりに関する発達的研究

安 達 圭一郎

A developmental study of prosociality in childhood and early adolescence.

Keiichiro ADACHI

## 問題及び目的

教育現場におけるいじめ、校内暴力等の問題が深刻化する中、児童・生徒の思いやりを育てる教育が益々重要視されてきている。その適切な方法論を模索するうえでも、これまで多くの研究者達によって、「思いやり」行動(向社会的行動)の規定因に関する研究が多数なされてきた。本研究は、こうした思いやり行動の生起過程に関する一連の研究に寄与することを目的としている。

思いやりとは、高野(1985)が指摘した「愛他性」という名称の下で研究されている人格特性あるいは社会的行動」の総称である。そして、従来の研究に位置づけるならば、その行動的側面としての向社会的行動(菊池, 1984; Mussen & Eisenberg-Berg, 1977)と「思いやりの心」で包括されるところの向社会的行動を誘発する内的動機や意図(共感性, 愛他心, 感情移入等; 平井・浜崎, 1985)とを含めた一連の過程として把握される必要がある。

向社会的行動は、Mussen & Eisenberg-Berg, 高野, 菊池によれば、1) 外的な報酬は期待せず、2) 他者の利益の為に、3) 自発的に生ずる行動であり、しかも4) ある種のコス

ト(損失)が伴う行動であると定義できる。そして、こうした行動は、性差、内的動機、価値観等の個人内要因、あるいは傍観者の有無、コストの性質、物理的環境等の状況要因によって規定されることが知られている。

主としてアメリカにおける向社会的行動研究の動向を展望した松崎・浜崎(1990)によると、関連研究の数は1988年4月現在で、3334件に及ぶことが分かっている。全てを概観することは困難であるので、ここではいくつかの知見を主としてわが国における代表的な研究から概観する。

例えば、松井・堀(1978, 1979)、松井(1981)の一連の研究では、大学生の援助行動は男性よりも女性に多くみられ、情緒的共感性は「苦境にある人をたすけるべき」といった規範意識として援助行動を規定すると指摘している。さらに児童を対象とした桜井(1986)、渡辺(1989)、首藤(1985, 1991)の研究も同様に、共感性は向社会的行動を動機づける要因であることを見出した。また、Staub(1979)は、他者がその場にいるかいないかで向社会的行動の出現に差異が生じるかを発達の観点も加味して検討した。その結果、小学1, 2年生の児童の場合、友人が同席している時に向社会的行動が出現しやすく、逆に4年, 6年の児童は1人である時に向社会的行動が出現しやすいことを見出した。

さて、以上述べた研究は特定の発達段階に限定した横断的研究が主であり、ある特定の要因と向社会的行動との関係を抽出し検討したものとと言える。しかしながら首藤(1991)も述べたように、こうした関係性は一義的なものではなく、個人内要因、状況要因それぞれが複雑に影響し合いながら向社会的行動の出現を規定していると考えられるのである。Eisenbergの諸説を基にモデル化した松崎らも、向社会的行動は、個人の価値構造・感情、コストに対する主観的評価、他者の要求への帰属、人格特性、場面状況(例えば緊急事態等)等の変数を含む、種々の要因の関数であるとしている。特に、教育場面における児童・生徒の思いやり行動は、こうした一連のプロセスを経て出現したものであることを考えると、個々の要因と向社会的行動との関連一つ一つを明らかにしてゆく作業と同時に、思いやりという広範囲な過程それ自体の一般的な様相を検討することが、さしあたっての教育現場における必要な情報と思われる。

そこで、本研究では、児童・生徒の包括的な意味での思いやりをとらえ得る質問紙尺度の構成を試みることを第1の研究目的とした。ここで、質問紙法をもちいるのは、実際の教育場面で容易に実施可能であり、しかも第2の研究目的である多年齢層に亘る児童・生徒の思いやりの変容過程が同一の基準で明確にできると考えたからである。

## 研究 1

### 1. 目的

「思いやり」として包括される一連の過程を測定し得る尺度(思いやり測定尺度)を作成し、その信頼性、妥当性を検討する。

### 2. 方法

被調査者 某県内の公立小・中学生380名  
(小4男子35名、女子30名；小5男子39名、女子31名；小6男子35名、女子39名；中1男子43名、女子44名；中2男子42名、女子42名)であった。

調査内容及び手続き ①調査内容：尺度項目収集の目的で予備調査を行った。現職歴3年以上の公立小・中学校教師50名(男性42名、女性8名)に対して、「児童のどのような行動に対して『思いやり』があると思うか」「『思いやり』のある児童にはどのような特徴があると思うか」を自由記述式で回答を求めた。その結果、200種類の回答が得られた為、KJ法により11の下位カテゴリーに分類した。各々のカテゴリーから項目間のニュアンスが異なるようにして40項目を選択し、児童・生徒に理解されやすい表現を用い暫定尺度とした。尚、11の下位カテゴリーとは、「同情・共感」「公平さ」「正義」「親切」「援助」「攻撃しない」「利他心」「自己犠牲」「寛容」「奉仕」「分配」であった。②調査手続き：暫定尺度40項目を各学校に依頼し、担任教師により学級ごとに実施された。回答は「はい・いいえ」の2件法で求め、「はい」と回答した項目に1点を与えた。また、40項目中2項目を逆転項目とし、「いいえ」の場合に1点を与えた。

## 3. 結果及び考察

暫定尺度40項目について、40×40の相関行列を求め、それにもとづき主因子法による因子分析をおこなった。固有値1.00以上を基準に因子を抽出し、バリマックス回転を施すことにより因子パターンを単純化した。その結果、全分散の24.3%を説明する解釈可能な21項目3因子が見出された(表1)。

第1因子(F1)は、「友だちが悲しんでいるとき、そのわけをきいてあげ、いっしょにかんがえてあげたりしますか」「友だちがこまっているときには、そうだんにのってあげますか」「だいなものをおとしたりなくしたりした友だちがいれば、いっしょにさがしてあげますか」等、主として個人内要因である共感性や外的行動としての援助行動に関する6項目に高い負荷量を示していることから「援助的・共感的」因子と命名した。

第2因子(F2)は、「友だちのあやまちを、ゆるしてあげることが出来ますか」「友だちが話しかけてきたとき、さいごまでよくきいてあげ

表1 思いやり測定尺度の因子分析結果 (n=380)

項 目	F 1	F 2	F 3
友だちがこまっているときには、そうだんにのってあげますか	.669	.040	-.071
友だちが悲しんでいるとき、そのわけをきいてあげたり、いっしょにかんがえてあげたりしますか	.589	.075	-.165
友だちが悲しんでいるのを見ると、なぐさめてあげますか	.589	.231	-.214
けがや病気の友だちを、たずけてあげたり保健室につれていってあげたりしますか	.538	.133	-.200
だいじなものをおとしたりなくしたりした友だちがいれば、いっしょにさがしてあげますか	.536	.251	-.113
友だちが病気でやすむと、たずねてあげますか	.373	.089	-.167
*ちょっとしたことで、友だちといいあそびますか	.003	.507	-.021
*しあいにまけたら、それを友だちのせいにするのがよくありますか	.014	.478	-.068
友だちが話しかけてきたとき、さいごまでよくきいてあげますか	.224	.428	-.102
話しあいのとき自分とははんたいの意見でもさいごまできくことができますか	.171	.383	-.216
友だちのあやまちは、ゆるしてあげることができますか	.222	.367	-.165
あそび道具を一人じめしないで、みんなとなかよくゆずりあって使いますか	.109	.353	-.215
友だちがいじめられているとき、いじめている子にやめさせようとしていますか	.252	-.027	-.593
そうじのとき、みんながいやがってしないところも、すすんでしますか	-.074	.178	-.538
なかまはずれにされている友だちがいたら、あそびなかまにいれてあげますか	.155	.119	-.486
友だちがけんかしているのを見ると、やめさせようとしていますか	.167	.052	-.482
友だちからたのまれたことは、よろこんでひきうけますか	.219	.205	-.423
花をもってきて、教室にかざろうと思うのがよくありますか	.108	.087	-.407
教室がちらかっていたり、ものがおちていたりすると、すすんでかたづけたりひろったりしますか	.087	.168	-.397
内気な友だちには、すすんでこえをかけますか	.283	.152	-.377
なかの悪い友だちとでも、なかよくしようと気をつかいますか	.256	.261	-.366
寄与率 (%)	10.052	5.847	8.422

(\*は逆転項目)

ますか」「話しあいのとき、自分とははんたいの意見でもさいごまで聞くことができますか」等の6項目を代表とする因子で、「寛容的・受容的」因子と命名した。

第3因子(F3)は、「そうじのとき、みんながいやがってしないところもすすんでしますか」「友だちがけんかしているのを見ると、やめさせようとしていますか」「友だちがいじめられているとき、いじめている子にやめさせようとしていますか」等、対人関係における積極的な働きかけや、自発的な愛他心に関する9項目に高い負荷量を示すことから、「積極的・愛他的」因子と命名した。

第1因子及び第2因子は、水塚・前田・浅川・米澤(1985)が独自に作成した愛他行動尺度を因子分析した際に得られた「援助」因子、「受容」

因子とほぼ類似のものと解された。また、第3因子の一部は、水塚らの「分配・協力」の因子と類似するものであった。

さらに、上記3因子は行動的側面とそれらを規定する個人内要因(菊池, Mussenら, 平井ら, 松崎ら)を含むとする本研究における「思いやり」の定義と合致するものであると考えられる。

以上より、この3因子21項目を「思いやり測定尺度」とし、信頼性、妥当性の検討をおこなった。

信頼性：被調査者から任意の1学級(男女各22名, 計44名)を抽出し、折半法による信頼度係数を算出したところ、 $r=0.76$ の値を得た。また、全被調査者380名の得点をもとに内的整合性を示す $\alpha$ 係数を算出したところ、 $\alpha=0.82$ の値を得た。以上より、本尺度の信頼性は十分満

足のゆくものであると考えられた。

妥当性：並存的妥当性確認の目的から被調査者のうち任意の1学級（男女各22名，計44名）を選び，担任教師に個々の生徒の思いやりについて7項目の評定を依頼した。内容は，①思いやりの気持ちが強いですか，②悩んでいる友だちの気持ちをわかってあげようと思いますか，③困っている友だちに手助けしようと思いますか，④人のあやまちを許してあげようと思いますか，⑤友だちの話しを最後まで聞こうと思いますか，⑥積極的にみんなと仲良くしようと思いますか，⑦掃除や作業等の時，みんなが嫌がるようなこともすすんでしますか，であった。各々5段階で評定を求め，その合計得点と思いやり測定尺度得点との相関係数を算出した。結果は  $r = 0.23$  ( $t_{(42)} = 1.56$ ,  $P < .10$ ) で有意な傾向を認めた。

このように，並存的妥当性の面でやや問題が残るが，既に述べた因子分析の結果は，本尺度のもつ因子内容が従来の向社会的行動研究により得られた知見に合致しており，構成概念妥当性の面では満足のゆくものであると考えられた。

こうした結果から，本尺度は，全般的な思いやりを測定しうる信頼性と妥当性をそなえたものと考えられた。

## 研究 2

### 1. 目的

思いやり測定尺度によって測定される思いやりが学年及び性によってどのように異なるのかを検討することが本研究における目的である。

### 2. 方法

被調査者 研究1と同じであった。

調査内容及び手続き 思いやり測定尺度を各学級単位で担任教師が実施した。被調査者には，各項目が自己にあてはまる場合には「はい」に，あてはまらない場合には「いいえ」に○印をつけるよう求めた。集計は，所定の思いやり反応に1点を与え，その合計得点を思いやり得点と

した。得点範囲は0-21点。

### 3. 結果及び考察

思いやり測定尺度得点を各因子毎に，性(2)×学年(5)の要因計画に従って分類整理したものが，表2である。

表2に基づき，各因子得点及び合計得点で2要因の分散分析を行ったところ，表3のような結果を得た。

まず「援助的・共感的」因子では，性の主効果及び性×学年の交互作用が有意であった。女子が男子よりも有意に高い得点を示したが，下位検定を行うと交互作用の内容を図示した図1からも明らかなように，学年によってその関係性は異なっていた。つまり，小4，小5の時点では，女子が男子よりも高い得点を示す傾向に

表2 各群における思いやり測定尺度の平均得点

	F 1	F 2	F 3	合計
男子	3.94	5.05	5.85	14.85
小	(1.45)	(1.10)	(1.88)	(3.13)
4 女子	4.53	5.20	6.06	15.80
	(1.63)	(1.27)	(1.77)	(3.94)
男子	4.17	4.25	3.66	12.10
小	(1.73)	(1.46)	(2.45)	(4.61)
5 女子	4.87	5.35	4.96	15.19
	(1.56)	(1.14)	(2.46)	(3.78)
男子	3.45	4.74	3.85	12.05
小	(1.72)	(1.09)	(2.00)	(3.35)
6 女子	5.30	5.46	5.89	16.66
	(1.05)	(0.82)	(1.75)	(2.62)
男子	3.32	4.53	3.18	11.13
中	(1.75)	(1.31)	(1.69)	(3.48)
1 女子	5.00	5.22	4.75	14.97
	(1.16)	(0.98)	(2.21)	(3.46)
男子	3.21	4.40	3.23	10.85
中	(2.07)	(1.76)	(2.61)	(5.59)
2 女子	5.50	5.19	3.26	13.95
	(0.49)	(1.38)	(1.96)	(2.79)

( ) 内はS.D.値

表3 思いやり測定尺度の分散分析結果

	F 1	F 2	F 3	合計	df
A (性)	F=78.89 P<.01	F=26.72 P<.01	F=21.59 P<.01	F=61.64 P<.01	1/370
B (学年)			F=17.00 P<.01	F= 6.56 P<.01	4/370
A × B	F= 4.34 P<.01		F= 3.13 P<.05	F= 2.37 P<.10	4/370

(P ≥ .10 は省略した)

とどまったが(小4 ;  $t=1.65$ , 小5 ;  $t=1.93$ , いずれも  $df=370$ ,  $P<.10$ ), 小6, 中1, 中2では, 女子が有意に高い得点を示すことがわかった(小6 ;  $t=5.18$ , 中1 ;  $t=4.69$ , 中2 ;  $t=6.40$  いずれも  $df=370$ ,  $P<.001$ )。さらにこうした差は, 女子が小4から中2にしたがって得点が上昇した(小4-小6 ;  $t=2.16$ ,  $P<.05$ , 小4-中2 ;  $t=2.70$ ,  $P<.01$ , 小5-中2 ;  $t=1.76$ ,  $P<.10$ , いずれも  $df=370$ )のに対し, 男子では小4, 小5間の差はないものの小5から中2にしたがって得点が下がったためであった。(小5-小6 ;  $t=2.02$ ,  $P<.05$ , 小5-中1 ;  $t=2.39$ ,  $P<.05$ , 小5-中2 ;  $t=2.70$ ,  $P<.01$ , 小4-中1 ;  $t=1.72$ ,  $P<.10$ , 小4-中2 ;  $t=2.03$ ,  $P<.05$ , いずれも  $df=370$ )。

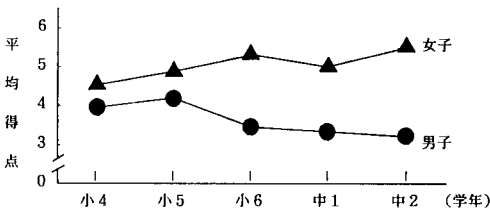


図1 性別・各学年別の平均「援助的・共感的」因子得点

「寛容的・受容的」因子では, 性の主効果のみ有意であり, 女子が男子よりも有意に高い得点を示した。

「積極的・愛他的」因子では, 性の主効果, 学年の主効果及び性×学年の交互作用全てが有意であった。図2にその内容を図示したが, 下位検定の結果, 男子では, 小4から小5で得点の低下がみられ( $t=4.43$ ,  $df=370$ ,  $P<.001$ ), 以降学年進行に伴う得点の変化は認められなかった。一方, 女子の場合, 小4から小5で男子同様得点の低下が認められたが, 小6で再び小4と同水準の数値に達し, 以降中1, 中2にしたがい得点の低下が顕著になるという興味深い推移を認めた(小4-小5 ;  $t=2.22$ ,  $P<.05$ , 小5-小6 ;  $t=1.88$ ,  $P<.10$ , 小6-中1 ;  $t=2.31$ ,  $P<.05$ , 小6-中2 ;  $t=5.33$ ,

$P<.001$ , いずれも  $df=370$ )。これを性差で見ると, 小4, 中2で差はないものの, 小5, 小6, 中1いずれも女子の方が高得点を示すというものであった(小5 ;  $t=2.63$ ,  $P<.01$ , 小6 ;  $t=4.04$ ,  $P<.001$ , 中1 ;  $t=3.16$ ,  $P<.01$ , いずれも  $df=370$ )。

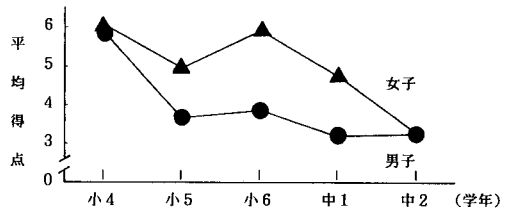


図2 性別・各学年別の平均「積極的・愛他的」因子得点

最後に合計得点では, 性の主効果, 学年の主効果が共に有意であり, 性×学年の交互作用に有意な傾向を認めた(図3)。下位検定の結果, 小4の男女間で差はないものの, 男子のみで小4から小5で得点の低下を認め, 男女間の差がみられた(男子小4-小5 ;  $t=3.10$ ,  $P<.01$ , 小5男子-女子 ;  $t=3.48$ ,  $P<.001$ , いずれも  $df=370$ )。そして, その後の学年でも女子>男子の関係は一貫していた(小6 ;  $t=5.19$ , 中1 ;  $t=4.32$ , 中2 ;  $t=3.49$ , いずれも  $df=370$ ,  $P<.001$ )。さらに, 男子では小5以降学年進行に伴う得点の変化は認められなかったが, 女子では, 小5-小6間で一時得点上昇の傾向をみたものの, その後中1との間で得点低下の傾向を, 中2との間で有意な得点の低下が認められた(小6-中1 ;  $t=1.90$ ,  $P<.10$ , 小6-中2 ;  $t=3.05$ ,  $P<.01$ , いずれも  $df=$

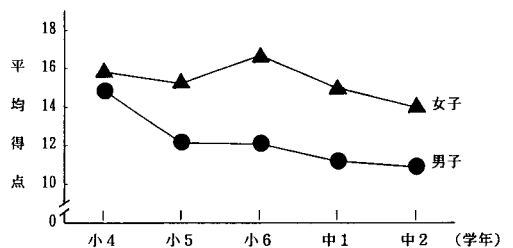


図3 性別・各学年別の平均合計得点

370)。

以上の諸結果に考察を加える。

①性差 全ての因子得点及び合計得点で、女子は男子よりも高得点を示した。このような性差は、大学生を対象とした松井ら、小学生を対象とした桜井、水振ら、浅川・松岡(1987)、中学生を対象とした田淵(1982)の研究においても認められており、女子の方が男子よりもより思いやりを示す点で一貫していた。これは、Mussenら、浅川らも指摘するように、思いやりは女子の性役割として重要な位置を占めており、これにそった行動を示すことで社会的承認を得る可能性が高まる為と考えられた。

②年齢差 従来、特に欧米においては、思いやりが学年進行に伴い増加すると考えられてきたが(Mussenら)、その後の我が国における研究では、児童期から青年期にかけて思いやりの全般的な減少傾向を指摘している(高野、水振ら、浅川ら)。本研究では、女子の「援助的・共感的」因子でのみ学年に伴う得点の上昇が認められたが、「受容的・寛容的」因子を除く他の指標では、男女とも逆に児童期から青年期にかけて得点が低下した。しかも、特に女子においては、小6をピークに顕著な低下を示している。

高野や菊池によると、思いやり行動の生起に関与するものとして、その行動に伴う犠牲や羞恥心をあげている。そして、このような認知的要因は、思いやり行動の生起を抑制するとしている。つまり、加齢に伴い周囲の状況あるいは自己の感情に対する認識が深まることで、結果的に犠牲や羞恥心等の抑制要因が増加し、思いやり行動の減少につながるのではないかとしている。この点は、青年期特有の発達心性からも理解できるように思われる。つまり、この時期は自己への関心が高まると同時に、他者からの評価に過敏になる時でもある。その為、自己の行動に対する他者からの評価を重視し、結果的に積極的な思いやり行動として生起しにくいと考えられるのである。特に、得点低下の著しかった「積極的・愛他的」因子の項目群は、「そうじのとき、みんながいやがってしないところも、すすんでしますか」「なかまはずれにされている

友だちがいたら、あそびなかまにいらてあげますか」等にみられるように、他者の目につきやすいという点で評価の対象となりやすく、同時に場合によっては否定的評価につながる危険性をもはらむ行動特性と考えられる(「良い子ぶって!」とは学級でよく聞かれる否定的評価である)。その為、状況認知の深まり、他者評価への過敏傾向がすすむ青年期では、いっそう行動生起に抑制がかかると考えられる。

本研究で得られた加齢に伴う思いやりの減少という結果は、上記諸点によるものと解釈されよう。

一方、女子のみでみられた「援助的・共感的」因子の加齢に伴う得点の上昇という結果については、Mussenらの指摘を検証するものと言える。しかしながら、共感性研究を概観した澤田(1992)によると、質問紙尺度によって測定された共感性は小学校高学年以降に得点の増加はなくなり、概ね横ばいになることが指摘されている。

この点について示唆的な研究に浅川・松岡(1987)がある。Feshbach & Roe(1968)のAST(Affective Situation Test)を基に作成したテストで小学校1・3・6年生の共感得点の変化を検討したところ、3-6年生間で得点が減少することを見出した。さらに、浅川らは、共感の対象が親密度の低い人物の場合、6年生の共感得点が著しく減少するとの結果を得た。つまり、青年期にさしかかる6年生では、対象との親しさによって共感性の程度が影響されることを示唆するものであるといえる。

こうした親密度という観点からこの結果を考察すると、本研究における「援助的・共感的」因子の項目にある「友だち」(共感の対象)とは、「友だちがこまっているときには、そうだんにのってあげますか」「友だちが悲しんでいるのを見ると、なぐさめてあげますか」等にあるように、評定者から見た場合、その文脈上親密度の高い人物と考えるのもあながち無理なことではあるまい。従って、親密度の高さにより共感性の減少が抑制され、結果として一般に共感性を多く示すとされる女子において、こうした得点

の増大をみたととも考えられよう。

## 要 約

本研究は、児童・生徒の包括的な思いやりを測定し得る尺度（思いやり測定尺度）を作成し（研究1）、性差及び発達上の変容過程を検討することを目的とした（研究2）。被調査者は公立学校に通う小学4年から中学2年までの男女、計380名であった。主な結果は以下の通りであった。

- 1) 思いやりの測定尺度は、3因子（援助的・共感的因子、寛容的・受容的因子、積極的・愛他的因子）21項目から構成されており、信頼性、妥当性とも満足のものであった。
- 2) 全ての因子得点及び合計得点で、女子は男子より有意に高い思いやりを示した。
- 3) 女子の援助的・共感的因子得点は、学年に伴い上昇することが分かった。
- 4) 「積極的・愛他的」因子得点及び合計得点では、男女ともに児童期から青年期にかけて減少することが分かった。

これらの結果を、従来の向社会的行動研究で得られた知見に基づき考察した。

## 引用及び参考文献

- 浅川潔司・松岡砂織、「児童期の共感性に関する発達的研究」、『教育心理学研究』, 35, 231-240, 1987.
- Feshbach, D. N., & Roe, K., 「Empathy in six- and seven-year-olds」, 『Child development』, 39, 133-145, 1968.
- 平井誠・浜崎隆司、「向社会的行動」, 『児童心理学の進歩』, 220-246, 1985.
- 菊池章夫, 『ふれあいと思いやりの心理』, 川島書店, 1984.
- 松井豊・堀洋道, 「大学生の援助に関する規範意識の検討（その1）」, 『日本心理学会第42回発表論文集』, 1298-1299, 1978.
- 松井豊・堀洋道, 「大学生の援助に関する規範意識の検討（その2）」, 『日本心理学会第43回発表論文集』, 755, 1979.

- 松井豊, 「援助行動の構造分析」, 『心理学研究』, 52, 226-232, 1981.
- 松崎学・浜崎隆司, 「向社会的行動研究の動向—内的プロセスを中心にして—」, 『心理学研究』, 61, 193-210, 1990.
- 水振義郎・前田和利・浅川潔司・米澤孝雄, 「教育環境における児童期の向社会的行動の発達的研究」, 『日本教育心理学会第27回総会発表論文集』, 62-63, 1985.
- Mussen, P. & Eisenberg-berg, N., 『Roots of Caring, Sharing and Helping : The development of prosocial behavior in children』 San Francisco : W. H. Freedom, 1977. (菊池章夫訳, 『思いやりの発達心理』, 金子書房, 1980)
- 桜井茂男, 「児童における共感と向社会的行動の関係」, 『教育心理学研究』, 34, 342-346, 1986.
- 澤田瑞也, 『共感の心理学—そのメカニズムと発達—』, 世界思想社, 1992.
- Staub, E., 『Positive social behavior and morality : Socialization and development. Vol. 2.』, New York : Academic press., 1979
- 首藤敏元, 「児童の共感と愛他行動—情緒的共感の測定に関する探索的研究—」, 『教育心理学研究』, 33, 226-231, 1985.
- 首藤敏元, 「児童の愛他行動に及ぼす情動的共感の影響」, 『埼玉大学紀要』, 40, 45-64, 1991.
- 田淵創, 「中学生の愛他的態度・愛他的行動・他人中心の価値観」, 『日本教育心理学会第24回総会発表論文集』, 506-507, 1982.
- 高野清純, 「思いやりの発達」, 『教育と医学』, 33, 228-234, 1985.
- 渡辺弥生, 「児童期において共感性が分配行動に及ぼす影響について」, 『筑波大学心理学研究』, 11, 85-91, 1989.

## <付記>

本論文作成にあたり、御指導頂いた兵庫教育大学内藤勇次教授（現神戸女子大学教授）、同浅川潔司助手（現助教）に心より感謝申し上げます。

本論文は安達かほり（旧姓大村）との共同研究である。

また、調査に御協力頂きました小学校・中学校の先生方、並びに生徒の皆様にも重ねて感謝申し上げます。